



優
秀
賞

筑西市立関城中学校 三年

思いやりから広がる世界

爲ため 貝がい 和歌菜わかかな

「思いやり」これは誰もが知っている言葉です。相手のことを考える、相手の気持ちになる、そんな当たり前のことは、私も十分に分かっているつもりでいました。しかし、「本当の思いやりとは……。」と考えるきっかけになる、あの出来事がありました。

台所で、夕飯の片付けを手伝っていた時のことです。お皿を洗って、隣の水切り台に置いて、食器を拭いて……。

「ああ、やっと終わった。テレビでも見よう。」
そう思った途端、祖母から、

「流しの周りの水滴を拭いてね。」

と言われました。やっと終わった、と思っていた私は、正直ムツとしました。

（いつもそうだ。靴を脱いだら向きを変えて揃えろ、とか、朝は自分から挨拶をしろ、とか、いちいちうるさい。多少流しの周りに水滴が残っていてもいいじゃない。）

そんな思いが顔に出たのでしょう。祖母は穏やかにこう続けました。

「おばあちゃんは背が低いから、水道の周りが濡れたままになっていると、服が濡れちゃうんだよ。」

（ほら、こんな風に。）と言うように、身に付けているエプロンの前を見せてくれました。それを見た途端、私は、はっとしました。胸の下あたりがびっしょりと濡れていたのです。私にとっては全く気にならなかった水道の高さは、背の低い祖母にとっては、背伸びするように手を伸ばして使

う高さだったのです。そしてその時に、どうしても体がシンクに触れてしまい、服を濡らしていたのです。私が今まで、祖母に対して、（細かいことを言っていちいちうるさい。）と思っていたことにはきちんとした理由があつて、祖母にとっては日々困っていることだから協力してほしい、という願いだつたのです。それが分かつた瞬間、本当に申し訳ない、という気持ちで一杯になりました。目から鱗が落ちるように、祖母の言葉がストーンと自分の胸の中に落ちてきました。と同時に、責められたわけでもないのに、自分の考えの足りなさが恥ずかしくなりました。

その日、帰宅した母にその話をしました。母は、（ああ、分かる。）とうなづいて、

「頭では分かかっていても、その立場になつてみないと気付かないことつてあるよね。和歌菜はおばあちゃんの服が濡れても構わないと思つていた訳じゃなくて、そもそもシンの周りの濡れていることで困る人がいるなんて思いもしなかつたんだよね。」

と言いました。そして、

「自分がされて嫌なことはしないつてことは大前提だけど、自分にとっては何でもないことが相手にとっては困つたこ

とだつたり、逆に嬉しかったりする場合もあるんだね。難しいね。だけど、そんな場合もあるんだつてことに気付けただけでも、人に対する接し方が変わってくると思うよ。」そう言ってくれました。私は何度も、今日の出来事と母の言葉をかみしめました。

この、ほんの小さな出来事がきっかけで、私はもの見方が変わりました。そして、世の中の様々な所で、誰かが相手や周りのことを考えながら行動したり、働いたりしている、そう思うようになりました。

人は誰もが同じではありません。誰かの当たり前が他の誰かにとっては当たり前ではなかったり、また、その逆もあり得ると思います。そんな中で、「自分だったら。」と相手に共感すること、そして、自分とは違う考えや立場の人に対して耳を傾けること、そうして互いに歩み寄ることが、心遣いであり、互いに気持ちよく過ごすための思いやりにつながるのではないのでしょうか。

誰もが相手の立場や周りを意識しながら思いやりをもって接することができる社会、そんな世界であつてほしいと私は思います。